

古事記 上巻 并序

【その後、冥界と現世を往復され、日と月の二神が、目を洗うときに生まれ、海水で身を洗うときに、諸々の神たちが出現しました。】

臣安萬侶言。夫混元既凝。氣象未効。無名無爲。誰知其形。

おみやすまらもうす

げんじよ こんどん はせ こ かた

げんじよ

【臣、太安萬侶がもうしあげます。原初に渾沌が初めて凝り固まったとき、万物の

かたち

なまえ

な

な

形と、いうものはありませんでした。名前もなく、何かをするとか、何かになると

いふこともなく、誰もその形を

な

かたち

し

【】

察生神立人之世。因本教而識孕土産嶋之時。元始綿貌。頼先聖而

かみをうみひとをたててをしりぬ

せがら せい へい

かみよ

たんにょう

【そして、世界の始まりは、暗くてはつきりしてませんが、神代からの伝承によつて、国土や島々をお生みになつた時のことが分かり、元始は、あまりにも遠いので

しかしてひんてんはなせめてわかたて

かみんてんそうかのなせをなせ

たれんげんほんのおちのなせ

然乾坤初分。參神作造化之首。陰陽斯開。二靈爲群品之祖。

しんてん

は

みなし

な

きん

【その後天地が初めて分かれ、三柱の神が現れて世界の起源となり、これによつ

しんてん

は

みなし

な

きん

て陰陽が発生して、陰陽の二柱の神が万物の創造主となりました。】

寔知 懸鏡吐珠。而百王相統。喫劔切蛇。以萬神蕃息敷。

かみか たまは

やま

おま

か

ひ

所以 出入幽顯。日月彰於洗目。浮沈海水。神祇皇於滌身。

ゆゑに いでいり

ひつげん せんげん

うきしん

かみ

【鏡を掛け、珠を吐いて、世々の王が皇統を守り、劔を噛み、蛇を退治して、

かみがみ しぜん はんせい わ

神々の子孫が繁栄したことが分かります。【

じんむてんのう たす お は ひと あらわ ゆ て ささき やたらす あらわ

神武天皇を助け、尾の生えた人が現れて行く手を遮ると、八咫鳥が現れて

よしのさんちゅう みちあんない

吉野山中の道案内をしました。【

あめ やすかわ そぞたん てんか ぐいし ねほま せもん くだ きよ

議安河而平天下。論小濱而清國土。

まがさしのねやぐをならしう うたをうたあなをやくす

【天の安河で相談して天下を平定され、小濱で議論をされて国土を清くされま

列舞攘賊。聞歌伏仇。

した。】

【久米の子らに舞をさせて八十建を討ち、歌を歌わせて登美毘古を討ちまし

た。】

是以 番仁岐命。初降于高千嶺。神倭天皇。經歷于秋津嶋。

是以 番仁岐命。初降于高千嶺。神倭天皇。經歷于秋津嶋。

すなわちあめにはかちねのひつてくだりたましう かちねあまのすめりひつて

即覚夢而敬神祇。所以稱賢后。望烟而撫黎元。

らまがむてんてんたう

於今傳聖帝。

すじんてんのう めめ おおがみ こは き じんま まう けんご たた

【崇神天皇は、夢に大神の言葉聞いて神祇をお祭りになったので、賢后と讃え

られ、仁徳天皇は、烟を見て民の暮らしを慰撫されたので、今も聖帝と呼ばれ

かめうしめをむかて てんけんをたかくたえ せむひみちをたかひののの

化熊出爪。天劍獲於高倉。生尾遮徑。大鳥導吉野。

【化け物のような熊が現れて爪を出せば、神劍が高倉によつてもたらされて

ております。】

定境開邦。制于近淡海。正姓撰氏。勅于遠飛鳥。

【天智天皇は、国の境を定めて多くの国を開かれ、近江の宮で政務を執られ、

允恭天皇は、姓を正し氏を明らかにされ、遠飛鳥の宮で世を治められまし

た。】

潜龍體元。存雷應期。

【水底に潜む龍だった天皇が、皇位に着かれ、雲の向こうでしきりに鳴っていた

雷であつた天皇が、活躍される時期が到来しました。】

離步驟各異。文質不同。莫不稽古以繩風猷於既類。

照今以補典教於欲絶。

【このように御代御代の天皇の政治は、それぞれ緩急があり、才能や資質もいろ

いろづきましたが、いずれの天皇も、いにしへのことをよく考えて、風儀や道徳が廃

れようとしていても、また正しくなれ、今のことを考えて、正しい人の道が絶えよ

うとしていても、また新たに力を加えて復興されました。】

暨飛鳥清原大宮。御大八洲天皇御世。

【飛鳥浄御原の宮で国の政を行われた天武天皇の御世に到つて、】

聞夢歌而想纂業。投夜水而知承基。

【夢の歌をお聴きになつて、皇業の継承を思い立たれ、夜、名張の横河のほとり

に行かれて、鴻基を受け継ぐ身であるとお知りになりました。】

しかれたらまたまたたたらわらうしかな

はた へん かなや

ぞへん 井 ぼろ

然天時未臻。蟬蛻於南山。人事共洽。

旗が軍を耀かせるようにひるがえって、賊軍は、あつとぐ間に滅びました。【

虎歩於東國。

未移浹辰。氣珍自清。

【しかしながら、また機会が到来しなかつたうちは、蟬が脱皮するように、するり

【速やかに悪い気は治まって清らかになりました。】

と吉野に脱れられ、お味方が多く集まった時は、虎のように雄々しく東国を歩

乃放牛息馬。愷悌帰於華夏。卷旌揖戈。舞詠停於都邑。

まれました。】

【ここで戦闘に使つた牛を解放し、馬を休め、凱歌を上げて、都に帰られました。

皇輿忽駕。凌渡山川。六師雷震。三軍電逝。

旗を巻き、武器を収め、舞い歌いして、都に留まられました。【

天皇が自ら出陣され、山川を越えて進まれると、全軍は雷のようにとど

【西の年二月に、飛鳥浄御原宮で即位されました。】

ろぎ、稲妻のように進みました。】

【西の年二月に、飛鳥浄御原宮で即位されました。】

杖矛擧威。猛士烟起。絳旗耀兵。凶徒瓦解。

【西の年二月に、飛鳥浄御原宮で即位されました。】

【誰もが一斉に、杖や矛を差し上げ、勇猛な兵士は、至る所から湧き出て、赤い

【西の年二月に、飛鳥浄御原宮で即位されました。】

杖矛擧威。猛士烟起。絳旗耀兵。凶徒瓦解。

【西の年二月に、飛鳥浄御原宮で即位されました。】

杖矛擧威。猛士烟起。絳旗耀兵。凶徒瓦解。

【西の年二月に、飛鳥浄御原宮で即位されました。】

杖矛擧威。猛士烟起。絳旗耀兵。凶徒瓦解。

【西の年二月に、飛鳥浄御原宮で即位されました。】

杖矛擧威。猛士烟起。絳旗耀兵。凶徒瓦解。

【西の年二月に、飛鳥浄御原宮で即位されました。】

杖矛擧威。猛士烟起。絳旗耀兵。凶徒瓦解。

【西の年二月に、飛鳥浄御原宮で即位されました。】

杖矛擧威。猛士烟起。絳旗耀兵。凶徒瓦解。

【西の年二月に、飛鳥浄御原宮で即位されました。】

杖矛擧威。猛士烟起。絳旗耀兵。凶徒瓦解。

【西の年二月に、飛鳥浄御原宮で即位されました。】

杖矛擧威。猛士烟起。絳旗耀兵。凶徒瓦解。

【西の年二月に、飛鳥浄御原宮で即位されました。】

杖矛擧威。猛士烟起。絳旗耀兵。凶徒瓦解。

【西の年二月に、飛鳥浄御原宮で即位されました。】

杖矛擧威。猛士烟起。絳旗耀兵。凶徒瓦解。

【西の年二月に、飛鳥浄御原宮で即位されました。】

杖矛擧威。猛士烟起。絳旗耀兵。凶徒瓦解。

【西の年二月に、飛鳥浄御原宮で即位されました。】

杖矛擧威。猛士烟起。絳旗耀兵。凶徒瓦解。

【西の年二月に、飛鳥浄御原宮で即位されました。】

みちはげたてしんたすぢ とうはじあうちうきよたあま

**道軼軒后**。徳跨周王。

てんのう ぢまな けんじう まる とく じあうちう こ

はらふ  
発展させられました。】

【天皇の行いは、あの軒后にも優り、その徳は、周王をも超えていました。】

しかのみならすちうかちうかんたてて ちうかくてちうはるはるるり、もしとまうらひしにして あまらかにせんにくをみたまう

**重加智海浩瀚**。潭探上古。心鏡火韋煌。明親先代。

けんをせとらてうけんをすん いてんをせせちらけんをなれなつ

**握乾符而摠六合**。得天統而包八荒。

あまぎせて うし くてい せんじう たいばん ぢうか

【天つ御璽を受け繼がれて、天地を治め、皇統を嗣いで、遠く異国までも王化され、心は澄み切つて、まぎで目の前のごとくのように古く時代のごとくを見通されま

せんじう ちえ うみ こふだ じやうい ちか たんまう  
た。】

れました。】

た。】

てんのかたしあまのこをい けんかしのくごうをのりてんをなれなつ

**乘二氣之正**。齊五行之序。

じふじゆうじゆう たた けんじゆうじゆう けんじゆう けんじゆう けんじゆう

【陰陽二氣を正しくされ、五行の循環を整えられました。】

こけいごうしん せんじゆうじゆう けんかしのくごうをのりてんをなれなつ  
於是天皇詔之。朕聞諸家之所齋。帝紀及本辭。既違正實。多加虚偽。

てんのかたしあまのこをい けんかしのくごうをのりてんをなれなつ

**設神理以奨俗**。敷英風以弘國。

あまのこをい けんかしのくごうをのりてんをなれなつ

【神の理を明らかにして、風俗を正しく良きものだとせ、優れた教える国を

しんじゆう けんかしのくごうをのりてんをなれなつ  
だ。」と仰せられました。】

あまのこをい けんかしのくごうをのりてんをなれなつ  
ある時、天皇は、「諸々の家々保有している帝紀(天皇の記録)と本辞(各家の

しんじゆう けんかしのくごうをのりてんをなれなつ  
史録は、もう事実と違つていて、偽りのことも多く付け加えられているぞう

あまのこをい けんかしのくごうをのりてんをなれなつ



てんのう ほろぎよ まだか か りち てんのう ししよ へんきん

【けれども、天皇が崩御され、世代が変わって、後の天皇は、史書の編纂をまだ

ひらひらひらりきぎんざんあつてくちちりてけりたごあつす

日浮重暉。雲散非烟。

こうらん

たいやうて かぎや わた そら くも ち けり

まわし あらわ

実行されようと思せぬでした。】

ています。】

伏惟皇帝陛下。得一光宅。通三亭育。

伏惟皇帝陛下。得一光宅。通三亭育。

伏惟皇帝陛下。得一光宅。通三亭育。

【おそれながら、元明天皇は、帝位におつきになって、徳を天下に広められ、

天地人の三才に通曉せられて、民を化育なまつておられます。】

かきしらねねをせむすけい ししむすこをただす とねひをしらねねをせむすけい

連柯并穂之瑞。史不絶書。

列烽重譯之貢。府無空月。

連理の木や嘉禾の出現が相次ぎ、史官はその記録を絶つことがありません。ま

たのろしを連ねなければ連絡できない国、通訳を幾人も重ねなければ、言葉の通

じないような遠い国からの朝貢が、毎月のように官府の倉に参っております。】

御紫宸而徳被馬蹄之所極。坐玄扈而化照船頭所逮。

御紫宸而徳被馬蹄之所極。坐玄扈而化照船頭所逮。

【宮中におおひれながらびらびらして、その徳は、馬が走る限りの距離に達し、皇居に

居ながらにして、その徳化は、卑しい船頭が漕いで行ける限りの範囲に届いていま

なほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほなほ

可謂名高文命。徳冠天乙矣。

【その名は、夏の禹王より高く、徳は、殷の湯王にも優つてゐると言ひつゝきつてい

す。】

う。】

於焉惜舊辭之誤忤。正先紀之謬錯。

於焉惜舊辭之誤忤。正先紀之謬錯。

【と】が、旧辞に誤りが多いことを残念に思われ、先代の古い記録が間違つて

ころのを正そうと】

然上古之時。言意並朴。敷文構句。於字即難。

然上古之時。言意並朴。敷文構句。於字即難。

【しかし、上古においては言葉も心も至つて素朴でしたので、文として文字に書き

写すのは、大変なことでした。】

以和銅四年九月十八日。詔臣安萬侶。

以和銅四年九月十八日。詔臣安萬侶。

撰錄稗田阿禮所誦之勅語舊辭。以獻上者。

撰錄稗田阿禮所誦之勅語舊辭。以獻上者。

【和銅四年の九月十八日、わたくし安萬侶におおせがあり、稗田阿禮がおおせ

によつて暗誦する旧辞を、文書に記録して献上せよとのことでした。】

【しかしすべて音で書いたのははいたずらに長くなつてしまつてます。】

謹隨詔旨。子細採拾。

謹隨詔旨。子細採拾。

【謹んで仰せにしたがい、阿禮の言葉を子細に記録しました。】

是以今或一句之中。交用音訓。



【このため、時に一句の中でも音と訓を混用していません。】

【このため、時に一句の中でも音と訓を混用していません。】

亦於姓日下。謂玖沙訶。於名帶字。謂多羅斯。如此之類。

もとにしたがいてあらためず

随本不改。

或一事之内。全以訓録。

或一事之内。全以訓録。

【一例を挙げますと、人の姓の「日下」を「くさか」と読み、人の名の「帯」を「たら

【また時には、一こと全体を、すべて訓で書かれています。】

【また時には、一こと全体を、すべて訓で書かれています。】

し」と言いますが、これらは、元のままに読んで、改めませんでした。】

即辭理難見 以注明意

即辭理難見 以注明意

大抵所記者。自天地開關始。以訖于小治田御世。

【そのため、言葉の筋が分かりにくい時は、注を付けて意味を明らかにしました。】

【内容の概略を言えば、天地の始まりから、小治田の御世（推古天皇）までで

た。】

す。】

況易解更非注

況易解更非注

故天御中主神以下。日子波限建鵜草葺不合尊以前。爲上卷。

【意味が分かりやすい場合は、あえて注を付けませんでした。】

【天御中主神から日子波限建鵜草葺不合命（神武天皇の父）までを上巻に

書いております。】

正五位上勲五等。太朝臣安萬侶。

かむやまといわれびのすめらみこといか

ほむだのみよげんを

なかつまをとなす

おほさわきこうていか

神倭伊波禮毘古天皇以下。品陀御世以前。爲中卷。大雀皇帝以下。

おほりだのおおみらいげんを

しめてまをとなす

小治田大宮以前。爲下卷。

じんむてんのう

おうちんてんのう

なかつま

だんとてんのういらい

すいこてんのう

【神武天皇から應神天皇までを中巻とし、仁徳天皇以降、推古天皇までを

しんむ

下巻としました。】

あむはてみんかんをじて

ついでなをうてひんてんす

おみやすま

せびてんせうまう

とんしんてんし

并録三卷。謹以献上

ほんろく

さんかん

しん

ついで

けんてん

おみやすま

いん

【全部で三巻に記しました。謹んで献上いたします。臣安萬侶、心から恐れ

入っております。】

入っております。】

和銅五年。正月廿八日。

わどういねん

しんげつにやふに

やふに